

二人の軽業師

小川未明

青空文庫

西と東に、上手な軽業師がありました。綱から、綱に飛びうつり、高いはしごの上でもんだりを打ち、見ていて、ひやひやすることをも手落ちなく、やって見せましたから、その評判というものは、たいへんなものでありました。西の方の人は、西の都で、興行をする甲の男をほめました。東の方の人は、東の都で、興行をする乙をほめました。

「さあ、どちらがうまいだろうな。」

両方の軽業師のするのを見たものは、頭をかしげました。それほど、この二人の芸は、人間ばなれがしているといつてよかったです。最初から、こんなあぶない芸当というものはできるものでありません。それには、血の出るようなけいこを積んだからです。

いつしか、西の都で、人気を呼んでいる甲の耳に、東の都で、やはり、たいへんな人気を呼んでいる乙の評判がはいりました。

「そんなに、乙は、うまいかな。ひとつ、こつそり見物に出かけてみよう。」と、甲は、思いました。

だれにも氣づかれないうちに、甲は、東の都へ、乙の芸当を見にやつてきました。そして、ふつうの見物人にまじつて、ながめていました。高い、高い、空中から、ぶらさがっている止まり木の手を放して、あちらに下がっている止まり木につかまる、あぶない芸当は、ほんとうに、見ているものをひやひやさせました。

「なるほど、これはうまいものだ。ふつうの芸人ではできないことだ。なにか、深い研究をつまなければ、こんな人間ばなれのした芸はされるものでない。」甲は、つくづく感心して、西の都にもどりました。

その後、乙の評判をするものがあると、甲は、いっしょになって、乙をほめました。「あの芸は、とうてい私にはできません。乙こそ名人です。」といって、謙遜したのです。

ちやうど、それと同じように、東の都で、評判を取っている乙の耳にも、西の都、甲のうわさがいりました。

「そんなに、甲は、偉い輕業師かしらん。ひとつ、こつそりといつてみよう。」とおもいました。そして、甲がしたように、乙も、そのことをだれにも告げずに、西の都へ出かけてゆきました。

これは、まったく、飛びはなれた業であります。高い、高い、空中から、飛び降りて、はるか下に張られた一本の太い綱をつかむのであります。まったく、命を投げ出してするのでなければ、いくら熟練をしても、思いきつて、できることではないのであります。

「なるほど、たいしたものだ。これは、人間のしわざでない。」と、深く感歎して、乙は、東の都へもどりました。

二人の軽業師は、たがいに相手の芸をほめたのであります。そして、二人は、いずれも一度、あつて近づきとなり、芸について話し合つてみたいと思つていました。

二人の思いが達せられるときがきました。甲と乙とは、あるところで出あつたのであります。

「あなたこそ、まったく、人間の力ではできないような、芸当をなさいます。私は、感心しています。」と、甲がいました。

「いや、私は、まだ未熟でございます。あなたの足もとへもまいりません。」と、乙は、謙遜して、答えました。

「そんなことはありません。あの揺れている止まり木をどうして、ほかのものがつかめる

「ものですか！」と、甲はほめました。

乙は、驚いて、

「そんなら、あなたは、私の未熟な芸をどこかでごらんくだされましたか……。」「と、たずねました。

甲は、笑つて、

「拝見しないどころではありません。西の都にも、あなたの評判はたいしたものですから、じつは、人に気づかれないようにして、東の都へまいり、みんなにまじつて見物しました。そして、感心して歸つたのです。」「と、すべてを打ち明けて話したのであります。

乙とて、やはり同じでありました。

「甲さん、私も、じつは、西の都へまいつて、あなたの芸を見てすっかり驚いてしまいました。そして、世間がもてはやすのもあたりまえだと、自分の未熟を恥ずかしく思つたのでした。」「といいました。

芸に熱心な二人は、はからずも同じ気持ちでありましたのです。二人は、覚えず顔を見合わしました。

「それで、あなたは、あの高いところから、飛び降りなさるときに、なにか、口のうちでおつしやるようですが、あれは、おまじないでございますか？」と、乙がたずねました。

「いえ、そんな迷信的なものではありません。それには、子細があります。私も、打ち明けますから、あなたも、あの揺れる止まり木をつかまえなさる秘術を教えてくださいませんか？」と、甲はいいました。

「では、お話いたしましたしょう……。」と、乙はうなずいて、つぎのようなことを話しました。

「私は、子供の時分から木に上ることは上手でした。どんなに高いところへ上つても、怖ろしいことを知りません。ある日、一羽の美しい鳥が村へ飛んできて、木立にとまって鳴きました。村では、珍しい鳥だといって騒ぎをして、どうかして、捕まえたものだといつて、その後を追いまわしたのです。鳥は、池の淵にあつた、高いけやきの木の枝さきにとまってさえずっていました。ここなら、だれも上れないだろうと、小鳥は安心していい声で鳴いていました。人々は、ぼんやり見上げて、どうすることもできません。私は、すぐに上つてゆきました。なるだけ、鳥の気づかぬように、静かにして、ようやく、手のとどきそうなところまできて、ちゆうちよしました。手を出したら、鳥が逃げると思

つたからです。近づいて見れば、見るほど、美しい鳥でした。どうしたら、捕まえられるかと考えていましたが、一思いに、捕まえるよりしかたがないと、ねらいを定めた刹那、鳥は、飛び立つたのです。私の体も、いっしょに、木から飛び上がると、鳥をつかまえました。私が、体は、もんどり打って落ちました。もし、それが、地面だったら、微塵に碎けてしまったでしょう。水の中へ落ちたばかりに助かりました。しかし、握っていた鳥は、死んでしまいました。それから、私は、急に村の人々からほめそやされました。両親の自分、ついに、こんな渡世にまで身を落としましたが、いつも、鳥を捕まえたときの呼吸ひとつで、どんな危ない芸当も、やってのけるのであります。」

乙の話を書いていた甲は、うなずいて、感心しました。

「なるほど、その呼吸です。よく、わかりました。」といって、頭を下げました。

つぎに、甲は、どうして、高い空中から、飛び降りて、一本の綱を大胆につかむかを話したのです。

「私が、口の中で、となえますのは、子守の名です。不幸なおつたという孤児であつた子守の名です。私が、六つばかりのとき、河の中に落ちました。おつたは、九つだったといます。泳ぎも知らぬのに、飛び込んで私を救おうとしました。私は、人に助けられま

したが、おつたは、ついに助かりませんでした。その後、私の一家も貧乏をして、私は、興行師に売られました。自分の身の不幸を思うにつけて、おつたがかわいそうになります。どうせ、いつ死んでも惜しくない身と思つて、おつたの名を呼びながら、私は、一本の綱に飛びつきます。不思議に、いまだ、それをつかみそこねたことはありません。死んだ、おつたの霊が守つていてくれるのでしよう……。」

これが、甲の話でありました。

「よくわかりました。精神の力です。芸が、命がけだからです。」と、乙は、感嘆しました。

その後のことであります。

「甲には、いくらうまくても、ぶらんこの止まり木につかまることができない。また、乙には、空中から飛び降りて、一本の綱につかまる、芸当はできない。」と、いう意味のことが、西、東で、人々のうわさとなりました。

「人間には、だれにも、できることと、できないことがあるものだ。」と、道理のわかつた人はいいましたが、わからないものは、

「甲と乙と、どちらが偉いかな！」などと、やはり比較をしたのであります。

もし、二人が、めいめいに、自分の独得の芸を守っていたら、なんのこともなかったでしょう。

乙は、どうかして、甲の秘術が学べぬものかと思いました。そして、いつも、揺れる止まり木をつかむときに、彼は、美しい小鳥の姿を思い浮かべたのを、ある日、甲から聞いた、不幸の少女の姿を目に描いたばかりに、止まり木をつかみそこねました。彼は、真つ逆さまに、地面へ落ちて死んでしまいました。

不思議なことには、甲が、高いところから、飛び降りるときに、いつも、おつたの名を呼んで、ちようど、水中へ飛び込む気で、綱をつかむのを、ある日、その名を呼ぶことを忘れて、美しい鳥をつかまえる調子で、綱を目がけて飛び下りました。すると、指さきは、綱にかかったが、綱は、あちらへそれて、甲は、堅い壁で頭を打って死んでしまいました。

東西二人の、名人の輕業師が、そろいもそろって、芸を仕損じて死んだといううわさが、また一時、世間を騒がしましたが、だれも、この二人の輕業師が、熟練しきっている芸当を、どうして仕損じたかという原因については知りませんでした。そのうちに、このうわさも消えてしまえば、かつて、二人の名人の輕業師が、東、西

にあつて、一人は、西の都をにぎわし、一人は、東の都をにぎわしたということすら、い
つしか、忘れられてしまったのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 7」講談社

1977（昭和52）年5月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第6刷発行

底本の親本：「未明童話集 5」丸善

1931（昭和6）年7月10日発行

※表題は底本では、「二人《ふたり》の軽業師《かるわざし》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：館野浩美

2019年8月30日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<https://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

二人の軽業師

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>